

平成 30 年度 「T-GAP」 実践報告

北原立朗・塗田佳枝・安達昌宏・福田美紀
都志見 聖子・小石川 瞳・松川 想・嶋田昌夫

生徒自らが社会課題を設定し、その解決に向けてアクションを起こす、課題解決型の学習に取り組む学校が増えている。SGHに指定されて以来、本校では2年次においてグループで身近な社会における課題を発見し、解決学習に取り組む「T-GAP (Tsukusaka Global Action Programme)」という授業を開発してきた。本論は、平成30年度に行われた実践について報告する。

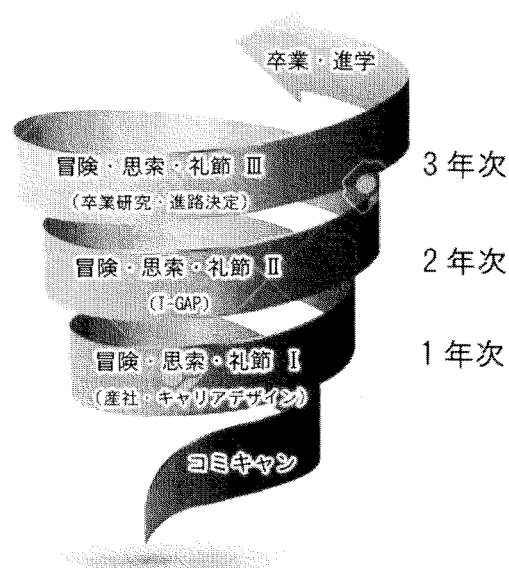
キーワード：課題解決型学習、社会課題、ソーシャルアクション、アクティブラーニング

1. 年次の目標

グローバル化が著しい今日、経済・物流・通信の世界共通化の動きに合わせ、教育も大きな転換の期を迎えている。このような社会で、いざ生徒たちが社会人となったときに必要となる人間性とはなにか。それはどのような状況に置かれようとも、どのような価値基準に照らされようとも、常に周りとの調和し、つながりを見出すことができる柔軟な思考と、たとえ周囲と異なっても自らの考えを表明できる確固たる信念を同時に併せ持つ「全局的な人間性」であると考えている。現2年次(24期)担任団は、この人間性の育成を卒業時の目標とした。

具体的には、「冒険・思索・礼節」というキーワードを大切にしている。これは3年間を貫く学校生活を通して身に付けてほしい人間性を表した言葉である。「冒険」とは未知なるものに対して主体的に行動し、与えられた知識でなく体験を通して学び取る姿勢、「思索」は物事を深く掘り下げ、表面的な理解ではなく高い抽象度を用いて探究する思考、「礼節」は多角的・多面的に周りを見渡し、無数の価値や視点を見出そうとする態度を表す。これは本校の生活目標である「自由・自律・自覚」にもそれぞれ対応している。このキーワードの獲得に向けた実際の活動の流れを右にイメージ図として表した。「冒険・思索・礼節」に対応する学習活動を年次ごとにスパイラルに配置し、

同時に学期ごとにも対応する活動を行っていく。



本年度の「T-GAP」では、「失敗を恐れずに、まずは自分たちで出来ることを考え、そして行動してみよう」をコンセプトとした。つまり、生徒たちの自主性とアイデアを大切に、失敗することも学習の一部と考え、可能な限り教員が手を出さず、多くの体験をさせることを目指したのである。このような進め方である以上、当然生徒の活動に差が出るのは避けられない。しかし大人の敷いたレールに乗るだけではなく自ら課題設定をして計画し行動するという流れは、生徒自身が授業を作り上げていくことでもあり、これからの社会を生きていく彼らにとって最も必要な学習活動だと考えている。

前述の「冒険・思索・礼節」を「T-GAP」の各学期の活動に重ねてみると、1学期は「冒険」として外に出て見聞を広め、2学期は「思索」として自分たちの学びを深め実践し、3学期は「礼節」としてこれまでの活動をまとめて他者に発信することで外部に及ぼす客観的な価値を考えるとということになる。以下、その詳細について報告する。

2. 「T-GAP」について

(1) 科目の位置づけ

「T-GAP」は Tsukusaka Global Action Programme の頭文字を取ってつけられたもので、本校 SGH 研究開発科目の1つであり、学校設定教科「国際科」(2単位)として開講している。2年次での学びの柱となるこの科目では、生徒たちが社会課題を発見・設定し、高校生ができる解決策を考え、グループでアクションとして実行することを課している。本校のキャリア教育が、1年次「産業社会と人間(以下、「産社」)・「キャリアデザイン(以下、「CD」)」、2年次「T-GAP」、3年次「卒業研究(以下、「卒研」)」という流れの中で、2年次の「T-GAP」は、グループで課題発見・解決活動を中心に行った経験を、「卒研」において求められる個々人の研究活動に活かすという意図で構成されている。「T-GAP」のような課題発見解決型の授業は、本校も認定校となっている国際バカロレアプログラムのコア科目「CAS (Creativity, Action, Service)」で、社会への奉仕活動などが求められているように、近年国内外の多くの学校で取り組まれ始めている。授業は、毎週土曜日(1・2時間目)に開講し、基本的には2年次担任団の教員8名で担当する。

(2) 本年度の基本構想

「T-GAP」は、平成27年度の試行的実施以来、本年度で4回目の実施であり、生徒の実態に応じて改良を重ねながら科目開発が進められてきた。科目目標や授業の大きな枠組みは大きく変わらないが、養いたい資質や能力のどれに焦点を当て

るかは当該年次によってやや異なる。例えば、平成28年度・29年度では、下記の資質・能力が重点項目として育成が目指されている。

【平成28年度】

① アジア地域、特にASEANに関する基礎的・基本的な理解を図りながら、国際的な日本の立場や役割について考察できる視点、② 国際的な視点を持って身近な課題を発見し、協働しながらその課題を解決しようとする態度、③ 自らの興味関心をもとに課題を発見し、その課題について客観的な視点を持って探求していくための方法について理解し、積極的に実践しようとする態度

【平成29年度】

① 自ら社会課題を設定し、解決に向けて考えて動く力、② 設定した社会課題の解決に向けて、グループで取り組む力、③ アクションした内容を適切なスタイルでプレゼンし、文章にまとめる力

24期生の1年次「産社」・「CD」の授業を通し、獲得したスキルを活かしつつ、3年次「卒業研究」へつなげることを意識しながら、① 自分の興味に基づくテーマを複数の立場で見る力、② 見つけた問題について、学校内外の人や組織と関わることで解決のアプローチを知り、考え、行動する力の育成に注力して取り組み、これらを通し、困難な状況にも負けず、課題に前向きに向き合い続ける態度を養うことを目指した。これらを踏まえ、生徒に対しては年度当初のガイダンスで、目標として (a) 自分が生きる社会の現状を知り、見つけた課題について多様な人と関わることで解決の方法を考え、行動に移す、(b) 自分の興味に基づくテーマを複数の観点から見たり、それらのつながりを意識したりできるようになる、(c) 活動の過程で新しいスキルを習得することなどを通して、自分の長所・成長すべき点を認識する、の3点にして示した。

(3) 年間計画

本年の「T-GAP」では、2学期に自分たちにとって身近な場で何らかの課題解決を目指して取り組む活動を最終目標である「アクションⅡ」として据え、その課題設定が妥当かアドバイスを受け、活動の実施に必要な知識やスキルを習得することを目的に、当該の社会課題を扱う外部団体を探し、夏季休業中に訪問することを「アクションⅠ」として課すという構成にした。その中で、「T-GAP」が3年次「卒研」との間に位置づけることも意識して、3回の活動・計画に関わる発表会（ポスターセッション、またはパワーポイント形式）並びに2回の報告書の提出を組み込み、生徒の探求学習に関わるスキルの向上を図った。そして、アクションを終えた3学期は、「プレ卒研」として、3年次の研究のための準備期間とした。次節から各学期の詳細を述べて行く。年間計画は資料1に示しているのを併せて参照されたい。

3. 1学期 - 「アクションⅠ」実施に向けて-

(1) pre T-GAP (カナダ校外学習・事後学習)

SGHに指定されて以降、生徒に早期に海外経験を積ませ、海外への興味関心を喚起することを目的に、1年次3月にカナダへの校外学習を実施するようになった。一方で、年度の切り替わりに重なり、帰国後十分にふりかえりができないまま、「T-GAP」に移行していたことから、24期生では4月の授業をpre T-GAPとし、カナダ校外学習・事後学習を兼ねた「T-GAP」のイントロダクションを行った。その1つとして、① カナダ校外学習



校外学習ふりかえりディスカッション

をふりかえって大切だと考えたことは何か、② 私達が生きている社会はどんな社会だと考えるか、自分たちはその中でどう生きていくか、という問いでグループディスカッションを行った。これは、カナダで触れた多文化主義やグローバル化の進む社会の中でどのように主体的に関わっていくか考えることを通し、後の「T-GAP」において、自分の生きる社会で実際に起きている課題を解決する、つまり、アクションを起こすための心構えをもたせることを狙いとして行った。当日は、保護者にもディスカッションに加わっていただき、活発な意見交換が行われていた。

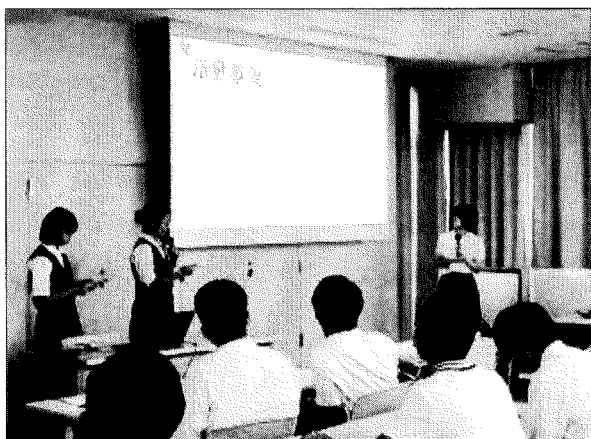
(2) 「アクションⅠ」計画の指導

既述の通り、本年度の「T-GAP」は「アクションⅠ」と「アクションⅡ」の二段構えで実施した。最終的に、自分たちの身近なところで課題解決のための行動を起こす「アクションⅡ」実施を目標に、そもそも課題の設定が妥当かを確認し、そのために必要となる知識やスキルを習得するため、該当する社会課題を扱う外部団体を訪問することを「アクションⅠ」として位置づけ、夏季休業中に行うことを課した。生徒に対しては、資料2のような形で年間を通した「T-GAP」の活動の流れを提示した。

まず、課題を発見・設定するにあたっては、生徒個人で興味を持つことやそれに関わる課題、自身の特技などをワークシート（資料5）に書き出し、いくつか活動の候補を出させた。それらで出た内容から分野を大きく4つに分けて各会場に生徒を集め、それぞれの希望を発表させた上で、同様の興味関心を持った生徒で3～5人のグループを結成させた。その後、班内で取り組む社会課題を調査し、高校生が取り組めそうな課題解決のための活動（＝「アクションⅡ」）を考えさせた。その前段階である「アクションⅠ」として、活動の実現のために必要となる知識や情報を得るなど、アドバイスを受けたり、共に活動したりすることを目的に、該当する課題に取り組む外部の団体（NPO、企業、

地方自治体等)を探し、訪問計画を生徒主体で立てさせた。社会課題を発見し、適切な訪問先を探し、決定するために、ワークシートを用い、文献やインターネット上の情報を用いながら取り組みたい分野の調査・情報収集をすることを課した。また「アクションⅠ」の計画立案にあたっては、各グループ分野に応じた担当教員が付き、適宜アドバイスをもらいながら進めた。その後最終確認として、年次の教員複数名で活動審査会を行い、活動の安全性、並びに訪問先・活動が妥当であるか、事前調査は十分に行われているかを確認している。

「アクションⅠ」実施前には、各班の計画を発表するとともに、互いの計画にアドバイスをし、より有意義な活動ができるようにすることを目的として、活動計画発表会を設けた。1グループあたり10分(発表時間6分、質疑3分)で、パワーポイントを用いた形式で、5会場に分かれて行った。当日は、生徒同士で互いの計画にアドバイスをし合ったのみならず、参観していた保護者の方から活動に関する助言も多く頂戴し、アクションの妥当性や実施計画について見直す機会となったようであった。



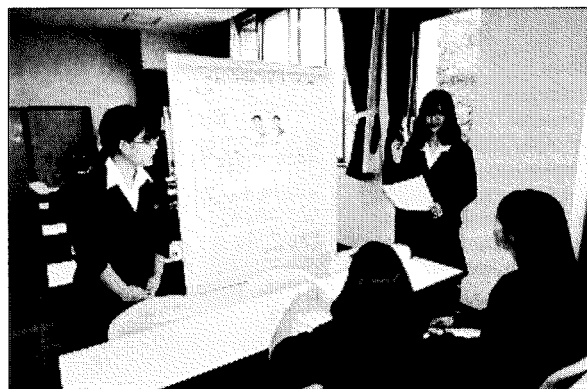
アクションⅠ計画発表会

(3) 「アクションⅠ」活動実践

計画発表会を終え、生徒たちは各々夏季休業中に「アクションⅠ」を実施した。一部、交渉が難航した班や、突発的なトラブルで夏季休業中の訪問が叶わなかった班もあったが、昨年度の「産社

における職場体験で生徒自身が訪問先を決め、交渉から計画・実施まで主体となって行った経験を活かし、ほとんどの班が関連団体を訪問できた。

「アクションⅠ」のふりかえり活動としては、活動内容や学んだことをまとめた報告書の提出、ポスターセッション形式の活動報告会を行い、これに併せてアンケート調査を実施した。ポスターセッションは、昨年度から数えて3回目であり、資料作成技術、並びにプレゼンテーション能力の向上が感じられた。報告書については、A4用紙2～3枚程度で、「① 問題意識、② アクション全体の対象・目的(活動の意義)、③ 先行研究のまとめ ④ アクションⅠの内容(訪問先・活動)、⑤ 考察/今後の展望(アクションⅡに向けて)、⑥ 参考引用文献(3つ以上)」についてまとめるよう指示した。



アクションⅠ活動報告会ポスターセッション

夏季休業中に行った「アクションⅠ」は基本的には外部での活動となるため、実際の活動内容は教員には見えにくい。学びの様子は本年度より導入したClassi(ベネッセ)を用いて実施したアンケート調査から伺い知ることができたので、ここでいくつか紹介したい。「アクションⅠ」の意義に関する質問では、有効回答数125人(159人中)のうち、「意義があった」と答えた生徒が67人(41.6%)、「やや意義があった」が49人(30.4%)、「想定とは異なったが意義があった」が6人(3.7%)と、約8割の生徒がアクションⅠについて何らかの意義を感じていた。その理由として、「今、何が問題になっているのか想像や考えだけで活動していたが、こうして訪問したことにより

現実を見える形で学ぶことが出来たため。また、分野のプロに話を聞くことで普段目を付けないところに目を付けることが出来たり、事前調査の内容を深めることが出来たりとかなり充実したものになったから。」という感想をはじめ、課題の最前線で活動している人の話を聞き、課題解決に必要な知識や情報を獲得することができた様子が伺える感想が多く見られた。一方で、「私達が計画していたアクションⅡでの活動があまり意義のないものだとは確信出来たため。」といった感想もあり、場合によっては課題の設定が適切でなかったことに気付かされ、軌道修正を余儀なくされたグループもあった。しかし、これらの気づきは、実際に現場に行ったからこそ得られたものであり、生徒に示した科目目標の (a) のうち、社会の現状を知り、課題について多様な人と関わり、解決の方法を考えるという部分、(b) の複数の観点から見る、という部分に相当する。このように「アクションⅠ」を通し、社会の課題について知見を深め、課題に関わる多様な考え方に触れる中で、自身の認識や考え方を変容させていったことが伺い知れる。各班の活動内容・訪問先は、資料2に掲載したのでそちらを参照されたい。

4. 2学期 - 「アクションⅡ」実施に向けて-

(1) 「アクションⅡ」計画の指導

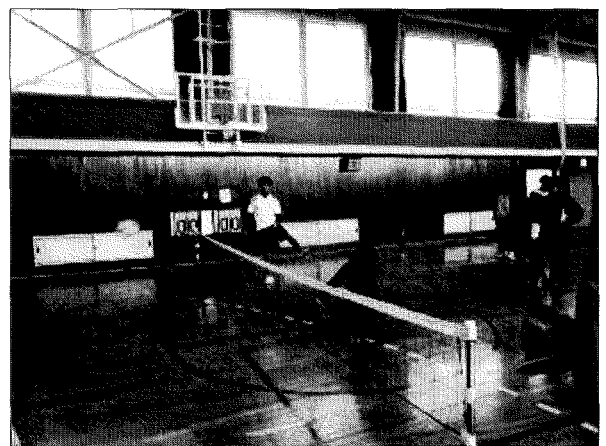
「アクションⅠ」での学びをもとに、2学期は各班「アクションⅡ」を再考し、実施し、活動の報告会までを行った。興味関心の変化等から、一部メンバー変更の生じたグループもあったが、概ね「アクションⅠ」から継続して活動を続けた。

「アクションⅠ」では、主に外部団体を訪問し、既存の活動に参加するという形であったのに対し、「アクションⅡ」は生徒が主体となって、身の回りの社会や世界での「課題」を生徒自身で見出し、その課題に向けて実現可能な活動をチームで考えて実現させる、というものであり、1学期に比べて難易度が高い活動であったと言える。NPO法人やボランティア団体での

既存の活動に取り組む生徒も多かった前年度までのT-GAP活動と比べると、今年度の生徒は学校内外の人を対象にした啓蒙活動などを自ら企画し、実施しようとする班が多く、生徒の創造性や自主性がかなり求められる内容であった。新たな「アイデアを生み出す」ことはとても難しいことである。ましてやそのアイデアを他者との共同活動で、しかも限られた時間と制約の中で実現させるためには数々のハードルをクリアする必要がある、安全面など配慮しなければならないことも多く出てきた。そのため、活動にあたって留意すべき点をまとめ、全体に説明し、1学期と同様の活動計画書の提出に加えて面談チェックシートを配布し、教員との面談をしながら安全性を確認する過程を加えた。このように、必要な準備を確認し、活動につなげていった一方で、多くのグループがアクションのアイデアを生み出すこと、実現させるための計画書作り、審査会に通ることに2学期の多くの時間を割くこととなり、活動自体に余裕を持って取り組めなかった班が出てしまった。

(2) 「アクションⅡ」活動実践

11月下旬を目処に実施するように期限を設定した「アクションⅡ」であるが、実現が困難と思われたアイデアをみごとに実現したチームから、期限までに思うような形での実施がかなわなかったグループまで見られるなど、活動内容や実現度には幅があったのは否めない。しか



アクションⅡ「アダプテッドスポーツの普及」

し、「アクションⅡ」の実現について、生徒たちは0から1を作ることの難しさ、アイデアを実現させることの大変さを体験から理解したのではないだろうか。各班が最終的にどのような活動を行ったかについては、「活動一覧」（資料3）としてまとめているので、参照していただきたい。「アクションⅡ」のふりかえり活動は、パワーポイントを用いた活動報告会に加えて、「アクションⅠ」と同様に報告書の提出を課し、アンケート調査を実施した。活動報告会は、1グループあたり9分（発表時間6～7分、質疑1～2分）を目安に5会場に分かれて実施した。活動内容の発表に加えて、「T-GAP」全体のふりかえりとして、「クロストーク」と題し、グループ混合の班を新たに作り、「T-GAPを通して学んだこと」について自由にディスカッションさせた。ディスカッションでは「協力すること」、「計画性の大事さ」、「楽しく取り組むこと」といった意見が多く出た。中には、「複数人で同じ課題について考えると、様々な視座・アプローチを産み、より良い考えを作る」ことができる一方で、「協同することの難しさも出てくる」といった意見もあった。「T-GAP」の活動全体によって、生徒が異なる背景を持つ他者と関わりながら、考えを変容させ、小さいながらも行動を起こし、他者に何らかの影響を与えたことを通して、様々なことを学び、成長した様子を垣間見ることができた。

報告書については、A4用紙3～5枚程度で、「1. 課題設定（1）課題と設定理由（2）文献調査 2. 活動内容（1）活動の目的と方法（2）アクションⅠについて（3）アクションⅡについて（4）成果と課題 3. 考察 4. T-GAPに取り組んで <参考引用文献>」についてまとめるよう指示した。「これに関しては、本年度に入って具体的なレポートの書き方等について指導する時間は設けられなかったため、体裁や引用などの基本的なルールが守られていない報告書が多くなってしまった。そのため、書かれた内容に重きを置いた基準を作成し、評価したが、「卒研」につ



アクションⅡ「古墳の魅力を広める」



アクションⅡ「ゲームの有効性を考える」



アクションⅡ「障害者の疑似体験ワークショップ」

なげけることを鑑みると、3学期の「卒研」に向けた指導の中だけではなく、1～2学期の「T-GAP」の指導計画にリサーチスキルの指導を何度か組み込むことも必要だったと考えられる。

5. 3学期 - 「卒業研究」に向けて-

(1) 10月: 「研究とは何か」を知る

科目としての「卒業研究」は3年次に置かれているが、例年「T-GAP」の活動の終了後あるいは並行した2年次10～11月に研究のガイダンスを始めている。

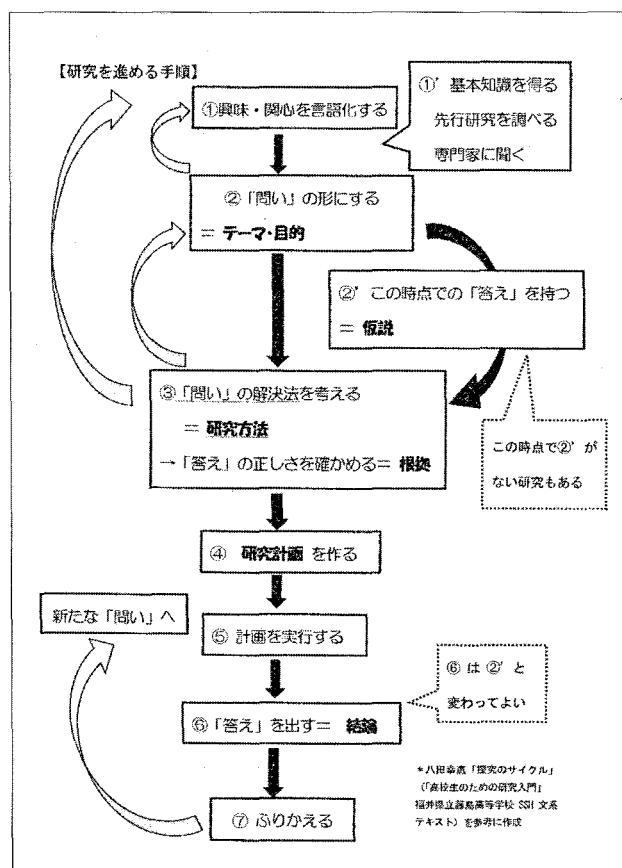
本年度は10月20日に筑波大学教授である校長の研究講話を行った。研究になるように課題を設定すること、何より楽しんで取り組むのが大事であること等、研究の心構えを知った上で翌週の3年次生による「卒業研究」発表会に臨むことができた。

毎年「卒業研究」で課題としてあがるのが、テーマ設定の難しさである。その原因として、高校生が扱えるレベルまで絞り込めないことが考えられる。研究初心者としては当然であり、試行錯誤しながら進めていくしかないのだが、一方で生徒は最初から完全なテーマを作ろうとして苦しみがちである。そこで本年度は初回に右図を示し、計画を立てるまでは何度でも修正する必要があることを説明した。またテーマも、「〇〇について」という形式では漠然としていて抽象的なレベルから抜け出しにくい。よって初めの数ヶ月は「テーマ設定」でなく「『問い』を立てる」と称し、取り組みたいテーマを「問い」(疑問形)で示させることにした。

(2) 12～1月: 「問い」を立てる

「T-GAP」アクションII報告会が終わった12月上旬から、本格的にプレ卒業研究に入った。まず個人で興味・関心から問いをできるだけ多く立てる作業を経た後、科目群ごとに5～6名のグループを作り、それぞれが作った問いを回覧・添削する活動を行った。他の人が立てた問い、書き込んでもらったコメントを見ることで新たな視点を獲得することができたようである。

次に、先行研究を調べるために必要となる文献の読み方を指導した。年次全体への説明の後、科目群ごとに共通の論文を与え、問いと答え、論の立て方に注目して読ませるとともに、多様な論点



があることに気づかせた。冬休みには関連する本や論文を読む課題に取り組みさせた。

1月には、研究計画を立てるために、研究の対象と方法について説明した。ここまでが2年次で行った研究ガイダンスであり、以降は各自で進めさせた。とは言え、この時点での「問い」はまだ広く抽象的であり、どのように絞り込んでいくのか、どんな研究方法を取るのかを自力で考えるのは難しい。そこで年次外も含め、自身のテーマに近い専門分野を持つ教員との面談を課して、研究の方向性を見つけさせた。

(3) 2～3月: 研究計画を作る

2月上旬には、研究計画を共有する活動を設定した。構想発表会の前に研究のタイプやテーマは様々であることに気づき、計画を練り直す機会とさせるためである。テーマ・科目群混合の5～6名のグループを作り、1人につき発表とアドバイスやコメントで10分を使った。中には計画がほぼ白紙に近い状態で悩みを相談する時間になっていた生徒もいたが、「友達からのアドバイスでテーマに対する不安が少し減った」「もう動き始

めている人がいるから早くしなくては」「他の人の計画を聞いて自分の研究の参考になることがあった」等のふりかえりの記述からこの時間を有意義に使ったことがうかがえた。

期末考査後の3月中旬には、ジャンルが近い生徒を7会場に分けて構想発表会を行った。例年は「研究の動機・目的・方法・進捗状況・参考文献」などをスライドで発表させることが多いが、本年度は「研究内容（「問い」を立てた動機・「問い」の説明）、対象・方法、『問い』に関するキーワード、今後に向けて、参考文献リスト」をレジュメにして3～5分で発表させた。また発表後の質疑に加え、アドバイスや疑問点を付箋に書かせて最後に交換させた。

レジュメ発表の効果としては、現時点のアイデアを文章でまとめる過程で問いや対象を修正したり、資料を手元に置いて聞くことで他者の研究への理解を深めたりする機会になったことが挙げられる。ふりかえりからは「(似ているテーマの人と)情報を共有して研究が行えるとよりよいものができるのではないか」「1人で進めるのではなく多くの人と関わりながら進めていくことが大切だと学んだ」など、研究は一人きりで行う閉じたものではなく、他者と関わりながら磨いていくものとの意識が見えて興味深い。これは、1年次の「産社」「CD」、11月まで取り組んだ「T-GAP」アクションのグループ活動によるところが大きいと思われるが、12月の問いづくり、2月の計画共有、3月の構想発表会と、他者とともに問いを考えてきた成果とも考えられる。4月以降に始まる、初めての本格的な「研究」では思い通りに行かないことも多いだろう。その時に同じゼミの仲間と励まし合いながら、前向きに取り組んでほしい。

一方、構想発表会では先行研究の調査不足が目立ち、研究の対象や方法に関しても検討すべき余地が大きい。2年次に立てた「問い」が3年次の最終レポートでは具体的な形となり、「答え」を示すことができるように、今後指導していきたい。

6. まとめ

以上、本年度「T-GAP」の主な内容を学期ごとに報告してきた。年度末に行ったClassiのアンケートと生徒のふりかえりをもとに考察したい。

年度当初に掲げた目標の(a)自分が生きる社会の現状を知り、見つけた課題について多様な人と関わることで解決の方法を考え、行動に移す(b)自分の興味に基づくテーマを複数の観点から見たり、それらのつながりを意識したりできるようになる(c)活動の過程で新しいスキルを習得することなどを通して、自分の長所・成長すべき点を認識するという目標は、概ね達成された様子が生徒のアンケート、ふりかえりから見て取れる。

まず「T-GAP」全体を通した学びについてであるが、「T-GAPでの活動にどのくらいの意義がありましたか」という設問に対して、54% (87人)の生徒が「意義があった」、35.4% (57人)の生徒が「やや意義があった」と回答し、概ね生徒たちは肯定的な意見を持っているようである。

「T-GAPでの活動を通して社会や課題に対するものの見方や考え方は変わりましたか」という設問に対しては、41% (66人)が「変わった」、34.8% (56人)が「やや変わった」と答えている。自由記述では、「今取り上げられている問題の裏にもまた別の問題があること、そしてそれは実際に体験しないとわからないと言うことがわかった」「今までは完全にサービスを受ける側の視点でしか問題や見解をできなかったが、提供側に回することで提供側の苦労や頑張り、また問題も見つけることができた」といったふりかえりが見られた。社会課題は複雑で相互に絡み合っているからこそ、一方向から見ただけでは不十分で、多角的に見ることが大切であることに気づくことができたようである。

「最初は、皆やりたいこともバラバラだったし、やりたいことも特に見つからなくて大変だったけど、もし1人だったら、否定してくれる人もいないし、話を広げていく人もいなくて進まなかったと思う。結果的にまとめることが出来たのは皆の個性や協力性あったからこそだと思う。」とい

うふりかえりのように、ものの見方の違う仲間と共に課題に取り組むことで、それを乗り越えるアイデアを生み出すことができる、ということを理解したと同時に、自分とは異なる他者と協働することの難しさを痛感した生徒も多かったようだ。

学年全体へのアンケートからも、他者との協働に関わるスキルが身についたと回答する生徒が多数見られた。「T-GAP」を通して成長したと考えるもの(資料4)として「課題や問題を見つけ、解決や改善に向けて取り組む力」(14.2%, 67人)を抑え、最も多かったのが「慣れない人々や環境の中で活動する力」(15%, 71人)や「人に言われてするのではなく、自分で考えて行動する力」(12.7%, 60人)であり、その他にも「メンバーの特徴や状況を考え、より良いグループにするために協力する力」(11%, 52人)といったスキルが上位に挙がっていた。年度当初の目標であった(c)活動の過程で新しいスキルを習得することなどを通して、自分の長所・成長すべき点を認識することに対し、「T-GAP」での活動を通し、生徒にとって特に他者との協働のために必要となるスキルを知り、その意義とともに実際にそうあることの難しさを多くの生徒たちが体験を持って認識することができたのは成果であるといえよう。

ここで、今年度の「T-GAP」実践を通して出てきた課題についても示しておく。第一に、アクション実施までのスケジュールが過密であったことが挙げられる。4月に前年度のカナダ校外学習の事後学習に時間を割いたことは、グローバル化が進み、多様化する社会の中での生き方・関わり方について考えるなど、「T-GAP」への移行には有意義だった一方で、やはりアクションの始動が遅くなってしまったところは否めない。特に、9月末から1ヶ月半で計画から実行まで到達させた「アクションⅡ」は、初めて課題発見解決型の学習に取り組む生徒が多い現状を鑑みると厳しい部分があった。また、本年度は各グループに担当教員は決められていたものの、基本的には共通の面談や審査会で状況確認を行う形を取った。これは、本年度は実質6人で担当しており、更には授

業日が土曜日という関係から、部活等での年次教員の出張が避けられず、生徒の実態を把握し、統一基準で安全性を担保するためであった。しかし、それに伴い、活動自体よりもアイデアを生み出す時間や、実現可能性を確認し、アドバイスを受ける面談・審査会に時間を割く班が多くなってしまった。そのため、授業時間内だけでは活動が完結せず、放課後などに「T-GAP」活動に取り組んだ生徒が想定以上に多くいた。そのため、部活動など課外活動との両立に悩んだ生徒を出してしまったことも反省すべき点の1つである。「アクションⅠ」に相当する外部団体へアプローチし、活動へのアドバイスをもらうことを早めに終わらせ、比較的ゆとりがある夏季休業期間に「アクションⅡ」に相当する生徒たち主体の活動の準備をし、無理なく2学期に入ってから活動が実施できるよう、グループの活動を継続して指導する方法なども考えられる。

次に、リサーチスキルの指導不足である。先述の通り今年度の「T-GAP」では、3回の口頭発表の機会、2回のレポート提出を課したが、特にレポート作成スキルについては課題が残る。24期生では、探求学習のテキストとして『学びの技—14歳からの探求・論文・プレゼンテーション』(後藤芳文ほか、玉川大学出版)を1年次より持たせ、これをもとに最低限守るべきルールについて指導した。しかし、2年次「T-GAP」の授業時間内では、レポート作成に関わるスキルを説明する時間を設けられず、基本的には該当ページを伝え、生徒たちが自習として参照する形となった。課題として出すだけでなく、書き方を指導する機会を1・2学期の間に設けておくことで、より充実したレポートになり、3学期のプレ卒研にもつながると考えられる。ただし、アクションを構成する段においてもそうであったが、講義型で一斉に指導をしてもなかなか生徒には届かない部分があり、実践の中から学ぶことも多い。レポート作成のスキルについて、本校でもより生徒の身につくように様々な工夫を凝らしてきているが、来年度の「卒研」本格実施に向けて、より良い指導の

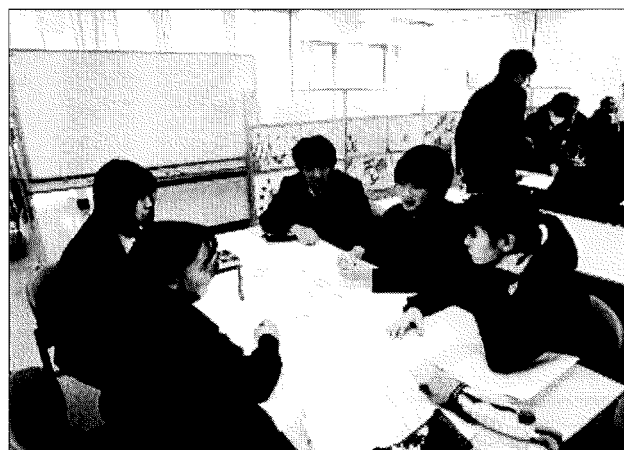
あり方を考えていきたい。資料5は、活動班の指導にあたった教員が本年度の実践について述べたものである。併せてご覧頂ければ幸いである。

最後に、高校生にできる「課題解決」について述べる。本校の「T-GAP」のように、課題解決型の学習が多くの学校で取り入れられているということは冒頭で述べた通りである。課題解決型学習は、決まった正解はなく、生徒がグループでの議論やアクションを通して問題解決へのアプローチ方法を学ぶという、物事を学ぶ過程を重視するものである。

昨今、課題解決型学習における活動実績が大学入試等で評価されるようになりつつある。進路に役立つか否かという観点からこういった活動の良し悪しが判断され、教員をはじめとする大人が子どもに失敗させまいと、時に活動のルールを敷いてしまったりすることがあるように感じられる。生徒もまた、自分が持っている本来の課題認識に基づいてではなく、大人の正解を当てに来ることもあるのではないだろうかという疑問が残る。柔軟な発想で社会に変革をもたらすような素晴らしいアイデアを考え、実現に至る高校生も世界中に存在するが、大人でさえ手をこまねく社会課題に対し、高校生に限られた時間内で有効な手立てを見出すことは、現実として難しい。だからこそ、授業として課題解決学習を行う場合、教員や大人が素晴らしいと思えた活動であるか以前に、それが生徒自身の関心に基づいて主体的に取り組まれている活動であるか、それを通して他者との協働性が育まれているかといったことこそが最も優先されるべきことであり、我々教員は忘れてはならないと考える。

本年度の「T-GAP」において、特に「アクションII」の活動では、予想通り生徒たちはアイデアを出すことに多くの時間を割き、出来た計画を実現するために話し合い、時に意見の対立からのグループ分裂なども見られた。しかしそのような状況であっても、教員は極力生徒たちの力に任せ、じっと待つという方針で臨んだ。「T-GAP」の意義

は、生徒が自由に何かに挑戦し、安心して失敗できる場を提供することで、困難な状況にも負けず、課題に前向きに向き合い続ける態度、そして異なる他者と協働する姿勢を養うことであり、生徒たちはこれらについて体験を通し、認識することができた。これから、24期生は本格的に「卒研」に向かっていく。「T-GAP」での活動から取り組むテーマを見出した生徒もいる。1年次の「産社」、「CD」、そして「T-GAP」で学んだことを活かしながら前向きに学びに取り組む姿勢を忘れずに、本校での学びを完成させることを期待し、引き続き指導していきたい。



付箋を使って課題点やアイデアを共有する



保護者を交え「課題」を考えるディスカッション

【資料1】平成30年度 T-GAP 年間指導計画

回	月日	単元	内容
1	4月9日	プレ T-GAP(カナダ校外学習振り返り)	個人テーマ・レポート発表準備
2	4月10日	プレ T-GAP(カナダ校外学習振り返り)	個人テーマ・レポート発表準備
3	4月14日	プレ T-GAP(カナダ校外学習振り返り)	カナダ校外学習発表会
4	4月21日	プレ T-GAP(カナダ校外学習振り返り)	「私たちはどのような社会で生きていくのか」
5	4月28日	ガイダンス	T-GAP のイントロダクションと活動目標
6	5月12日	課題学習(アクションⅠ)	グループディスカッション・構想シート記入
7	5月26日	課題学習(アクションⅠ)	グループづくり・アクションⅠの内容を考える①
8	6月2日	課題学習(アクションⅠ)	アクションⅠの内容を考える②・計画書作成①
9	6月9日	課題学習(アクションⅠ)	アクションⅠ計画書作り②
10	6月16日	課題学習(アクションⅠ)	アクションⅠ 審査会
11	6月23日	課題学習(アクションⅠ)	構想発表会準備
12	7月14日	課題学習(アクションⅠ)	アクションⅠ 構想発表会
	夏季休業中	課題学習(アクションⅠ)	アクションⅠ 活動
13	9月15日	課題学習(アクションⅠ)	活動報告会準備
14	9月22日	課題学習(アクションⅠ)	アクションⅠ 活動報告会(ポスターセッション)
15	9月29日	ガイダンス	グループ再編成・アクションⅡを考える
16	10月6日	課題学習(アクションⅡ)	アクションⅡ 計画・審査会①
17	10月13日	課題学習(アクションⅡ)	アクションⅡ 計画・審査会②
18	10月20日	プレ卒業研究	卒研ガイダンス①校長研究講話・「問い」を立てる
19	11月10日	課題学習(アクションⅡ)	アクションⅡ ふりかえり
20	11月17日	課題学習(アクションⅡ)	活動発表会準備
21	12月1日	課題学習(アクションⅡ)	アクションⅡ 活動報告会
23	12月8日	課題学習(アクションⅡ)	アクションⅡ 代表者報告会・卒研「問い」づくり
24	12月15日	プレ卒業研究	卒研ガイダンス②文献を読む
	冬期休業	プレ卒業研究	卒研に向けた参考文献を読む(宿題)
25	1月12日	プレ卒業研究	卒研ガイダンス③研究計画を作る
26	1月19日	プレ卒業研究	テーマ探し・研究計画作成
27	1月26日	プレ卒業研究	テーマ探し・研究計画作成
28	2月9日	プレ卒業研究	研究計画の共有
29	2月16日	研究大会	研究大会 T-GAP 発表
30	3月1日	T-GAP(卒研に向けて)	構想発表会準備
31	3月13日	T-GAP(卒研に向けて)	構想発表会直前準備
32	3月15日	T-GAP(卒研に向けて)	卒業研究構想発表会

【資料2】T-GAP アクションI 訪問先一覧

班	訪問場所	活動概要
1	農業技術研究センター	子ども対象の農業体験の企画
2	農家カフェ・ベリーズ	収穫祭開催
3	NPO法人フードバンク狛江	日本の食品ロスと貧困問題の解決
4	八景島シーパラダイス	魚による癒やし効果の測定
5	埼玉県立川の博物館	中学生に向けた指標生物に関する講座開催
6		森林環境保全
7	ピットイン今村	バイクのデモラン、試乗
8	ニンテンドーゲームフロント	ゲームの試遊会開催
9	アートファクトリー玄	分別を意識するゴミ箱作成
10	NICT-情報通信研究機構/NTT技術史料館	動画編集・公開
11	株式会社チアリー	小中学生対象のプログラミング教室
12	NPO法人「不登校生徒」	不登校児・保護者に向けたホームページ作成
13	東松山障害者就労支援センターザック	障害者と共に働くための活動
14	集英社 Seventeen編集部	ファッションショーの開催
15		
16	坂戸市立南小学校	英語教室の開催
17	埼玉県庁観光課	外国人観光客向け埼玉PR動画の作成
18	女子栄養大学	和食を通じた子ども・高齢者との交流
19	ピースワンコ・ジャパン 世田谷譲渡センター	ペット譲渡の広報活動
20	NPO法人 おさかなポスト	外来種の保護活動
21	ペットショップコジマ 浦和店	動物の殺処分を減らす
22	NPO法人 持続可能な社会をつくる元気ネット	食品ロスについてのワークショップ
23	千代田保育園	野菜の大切さを子どもに伝える
24	かすかべこども食堂ひなた	貧困問題を子どもと考える
25	日本礼儀作法協会	訪日外国人を対象日本のマナーの動画作成
26	伝統工芸青山スクエア	東武東上線伝統工芸品のマップ作成
27	株式会社ブルークス	筑坂のPR動画作成
28	越谷市立光陽中学校	社会問題を考える音楽作成
29	百舌鳥古市古墳群	古墳模型の作成
30	川越クリアモール献血ルーム	中・高校生に向けた献血PR
31	埼玉医科大学病院	子ども・病院・ビジネスに関わる活動
32	NPO法人クラブしっきーず	小学生対象外遊び考案
33	澤の屋旅館	訪日外国人へのサポート
34	東京隅田川ユースホテル	子どもに向けた異文化体験
35	埼玉県障害者交流センター	福祉に関わるホームページ、ポスター作成
36	日本バスケットボール協会	スポーツの普及活動支援
37	つくしんぼクラブ(学童)	子供向けスポーツ教育
38	NKFC(サッカーチーム)	小学向けサッカー教室開講
39	Let's Go 車椅子バスケットボール	パラスポーツの普及活動
40	メットライフドーム	小学生への野球講習会

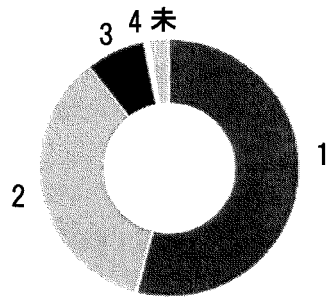
【資料3】T-GAP アクションII 活動内容一覧

班	活動概要/タイトル	活動内容	協力団体
a1	小中学生対象食に関するワークショップ	小豆の収穫体験と調理・食事会・食育の講義	
a2	セキュリティに対する動画制作活動	セキュリティ人材不足に対して知識を知ってもらい興味を持ってもらう活動	
a3	小学校中・高学年のための英語教室開催	小学生に興味を持ってもらえる英語の授業の実践	坂戸市立南小学校
a4	小学生対象食に関するワークショップ	食品ロスに関するワークショップ(小学5年生対象・総合的な学習の時間)	坂戸市立坂戸小学校
a5	入院小児患者のための遊具の作成・贈呈	入院小児患者のための遊具を作成し、小児患者に送る	チクチク会
a6	バラスポーツ普及のための体験会	バラスポーツを広めるためシッティングバレー(座ったままバレー)を行うイベント開催	
a7	野菜スタンプを作るワークショップ	野菜スタンプを作るワークショップを子供たちと行い野菜に興味を持ってもらう活動	
b1	食品ロス削減のために	フードロス削減のためのポスターを作成し飲食店に掲示してもらう	
b2	小学生向けプログラミング教員の講習会	小学生向けのプログラミング教室の開催し体験してもらう	株式会社チャリスタープログラミングスクール
b3	埼玉県の魅力を伝えるため	行田市の観光場所の撮影をしPR動画を作成する	埼玉県庁観光課
b4	子ども食堂での勉強会開催	子ども食堂の運営の手伝い、学習活動のサポートを行う	かすかべ子ども食堂ひなた
b5	自分たちが考えた遊びで小学生の体力向上	自分たちが考えた遊びをNPO法人しっきーず所属する子供と一緒にやる	NPO法人しっきーず
b6	野球振興のため小学生対象の野球教室を開く	小学生対象の野球指導法を考え、体験してもらう。	
b7	小学生への異文化ワークショップ	留学生の児童とともにクイズや遊びを通した異文化交流会の開催	上広谷児童館
c1	ヒト・魚のどちらもが心地よく過ごせるために	魚を教室に飼うことで生徒のストレス軽減への影響調査	
c2	親子世代へのe-スポーツの意義の普及と意識改善	親子でゲーム体験をしてもらいゲームの有意義性の調査する	坂戸市立南小学校
c3	障害者サポートのためのワークショップの開催	障害者の疑似体験や、障害に関する講義を行うワークショップを校内で行う。	
c4	埼玉の工芸品マップを作る	観光客に向けた埼玉の工芸品マップを作り東上線駅に置いてもらう	
c5	訪日留学生に対するシェア活動	邦人留学生向けの日本についての紹介ガイドブックを作成し、ホテルや施設などに置いてもらう	
c6	子供たちに音楽やダンスの楽しさを伝える	近隣幼稚園でイーブイマーチの踊りを通して音楽やダンスの魅力を伝える	坂戸ひまわり幼稚園
c7	森林保護に対する意識向上のための広報活動	個別相談待ちの中中学生対象に森林保全の大切さをレクチャー	
d1	若い人にバイクの魅力伝える	バイクの安全運転教室の実施	
d2	お年寄りとお孫さんのための料理交流会	調理を通した小学生とお年寄りの交流会	
d3	殺処分現状を知ってもらう	自分たちで育てた花の苗を配布し殺処分の現状のための募金活動	埼玉県動物指導センター
d4	筑坂の知名度を上げるためのPV作成	中学生・保護者に対する筑坂の知名度を上げる動画作成・公開	株式会社ブルークス
d5	外見だけじゃない!ヘルプマークの心の代弁	①障がい者理解につながるHP作成②筑波大学での広報活動	埼玉県障害者センター
d6	地域の川を考える	川の環境保護につながるポスターを作り掲示してもらう。	川の博物館・環境学館いすみ
e1	いじめ問題を考えさせるためのPCゲーム作成	希望者を集めゲームをやってもらい感想を聞く。	
e2	小学校5,6年生に向けた英語の授業の実践	英語の得手不得手が出る時期に向けた英語の授業実践	
e3	外来種問題と向き合う	外来種の問題点と解決法を考える。	
e4	古墳を校内で作る	古墳を作り伝統文化を考え、古墳についてってもらう活動	
e5	バスケットが出来る環境を創るために募金活動	バスケットボール施設を国内に増やすための、バスケットボールの試合会場来場者に向けた募金活動	日本バスケットボール協会
e6	子どもに対しての農業ミニ体験	筑坂で開催される子供食堂参加者との野菜収穫体験	子供食堂
f1	分別しやすいゴミ箱を作る	ゴミ問題解決のためのゴミの分別を促すボックスの設置	
f2	筑坂女子のためのファッションを考える	筑坂女子生徒に向けたファッション雑誌の作成とファッションに対する調査活動	
f3	殺処分の現状と保護施設存在	動物の殺処分の現状を知ってもらうワークショップの開催	
f4	若者の献血に対する意識向上	献血車を校内に呼び献血を呼びかけ、献血の必要性を広める広報活動	日本赤十字社
f5	外遊び推奨のため新たな遊びを考える	楽しいドッジボールのルールを考えポスターにして小学校に掲示	鶴ヶ島市立藤小学校
f6	礼儀作法に関する動画作成	外国人に役立つ日本の礼儀作法の見本例を動画で配信	

【資料4】T-GAP 事後アンケート

設問1 T-GAPでの活動にどのくらいの意義がありましたか？

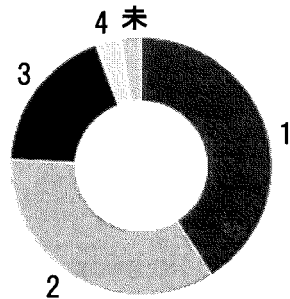
回答数157



- 選択肢1 87人(54.0%) 意義があった
- 選択肢2 57人(35.4%) やや意義はあった
- 選択肢3 12人(7.5%) あまり意義はなかった
- 選択肢4 1人(0.6%) 意義はなかった
- 未回答 4人(2.5%)

設問3 T-GAPでの活動を通して社会や課題に対するものの見方や考え方は変わりましたか？

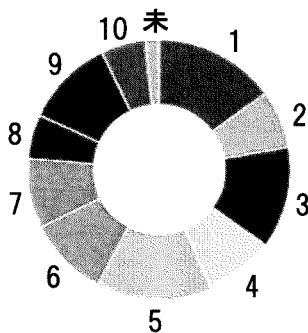
回答数157



- 選択肢1 66人(41.0%) 変わった
- 選択肢2 56人(34.8%) やや変わった
- 選択肢3 30人(18.6%) あまり変わらなかった
- 選択肢4 5人(3.1%) 変わらなかった
- 未回答 4人(2.5%)

設問8 設問7の回答について、成長したと考えるものを次の中から「最大3つ」選んでください (複数選択)

回答数155



- 選択肢1 71人(15.0%) 慣れない人々や環境の中で活動する力
- 選択肢2 34人(7.2%) 性格や将来など、自分自身のことを考える力
- 選択肢3 60人(12.7%) 人に言われてするのではなく、自分で考えて行動する力
- 選択肢4 41人(8.7%) 困難なことがあってもあきらめず、最後までやり遂げようと努力する力
- 選択肢5 67人(14.2%) 課題や問題を見つけ、解決や改善に向けて行動する力
- 選択肢6 47人(9.9%) 色々なことに興味を持ったり、新しいことへの挑戦を楽しむ力
- 選択肢7 41人(8.7%) 他の人に自分自身の気持ちや考えをことばで伝える力
- 選択肢8 26人(5.5%) 相手の身になって気持ちを理解したり、助け合って活動したりする力
- 選択肢9 52人(11.0%) メンバーの特徴や状況を考え、よりよいグループにするために協力する力
- 選択肢10 26人(5.5%) グループ活動を円滑に行うために、進んでリーダーシップをとる力
- 未回答 8人(1.7%)

【資料5】教員から見た T-GAP での学びの意義・生徒の変容・運営上の課題

本年度の実践にあたった教員が、T-GAP での学びの意義や生徒の変容、計画・運営上の成果や課題を記した。

[a]

前年度の校外学習の振り返りから、「グローバル」「多文化共生」についての考えを深め、社会で問題となっていることに目を向けるところから T-GAP の活動が始まった。その後、仲間とのディスカッションなどを通して、興味のあることがどのように社会と繋がっているか、そこにはどのような問題があり、自分たちはどのようなアクションを起こすことができるのか考えていった。はじめからやりたいことが明確なグループ、興味はあるがどのように自分たちが関わっていけば良いか分からないグループ、何から手をつけて良いのか分からないグループなど、スタート地点もそれぞれ。生徒たちは、与えられた課題をただこなすだけではない、「自由」だからこそその難しさも感じていたようだ。また、一つのプロジェクトを成功させるためには多くの人の協力が必要なこと、一つ一つの行動には意味があること、先を見通して計画を立てる必要があることなど、試行錯誤を繰り返しながら学んでいた。

「卒業研究」とは違い、グループで取り組むところにもこの科目の意義はあると考える。同じような興味関心を持ち、同じゴールを目指していても、すれ違いは起こる。どのようにしたら相手に伝わるのか、どのようにして折り合いをつけていくのか、悩みながらも前に進まなければならない中で、自然と「協働学習」を学んでいった。体験を通して学んだことは、難しい参考書を読むよりも多くのことを教えてくれる。社会に出たら必ず他人と関わり合い、協力しながら生きていく。その縮図とも言えるこの活動を通して生徒が得たものは大きいだろう。生徒たちは、これから「個」に戻り、卒業研究を進めていく。この1年間で学んだことを生かして、それぞれの集大成となる研究を行ってほしい。

(外国語科 小石川 瞳)

[b]

T-GAP は、1年次と3年次の学びをつなぐ大きな役割を担っている。この2年次での活動の良し悪しが、その後の進路選択に影響することも、現3年次の進路選択の様子から見ることができる。特に、本校では、3年次に個人での課題研究である「卒業研究」が控えており、T-GAP におけるグループでの課題解決型の学習は、卒業研究に必要な能力・スキルの下地を作るうえで重要な過程（課程）である。T-GAP では、自らの興味関心に合わせて課題を見つけ、同じような課題意識を持った仲間とグループを作り、協力して課題の解決を行っていく。課題を設定するための論文検索や解決方法を考えるためのエビデンスの収集など、基礎的な研究スキルを身に着けることが求められた。なれない作業ということもあり課題設定や計画立案では、多くのグループが苦勞していた様子であった。また、グループ内での役割分担や協力が、アクションを起こすうえでとても重要な要素となっており、ときには意見が対立しながらも、最善の解決策を求めて試行錯誤をして活動を行うことで、他者との協働の難しさや重要性を感じていたのではないだろうか。まとめの発表では、活動を通して、学校内外の人々を巻き込んでいき、学内にとどまらない活動を行うことで、視野の広がりや新たな気づきを得ていることを確認することができた。特に、普段の学校生活では見ることができない生徒たちの表情や行動を、アクションの中で垣間見ることができたことは、とても新鮮であった。普段の授業では考えるだけで終わってしまうことが多いが、T-GAP では実際にアクションを起こしその効果や影響を肌で感じるができるどころに、この授業の意義があるのではないだろうか。(保健体育科 松川 想)

[c]

アクションⅡまでを振り返ってみると、特に2学期が慌ただしかった。9月末から1ヶ月半で実行まで到達させる計画は、初めてプロジェクト型学習（PBL）に取り組む生徒が多い現状を考えると無理があったように思う。また課題の設定や解決方法を考えさせる上で必要な情報収集や原因の分析、先行事例の調査はアクションⅠに関連する学習活動であったが、期日までに審査を通すことが優先され、十分に時間を取ることができなかった（アクションⅡでも同様）。これらのリサーチスキルについて1学期のうちにある程度指導しておく、3学期の「プレ卒業研究」にもスムーズに移行できる。

本年度は授業日をほぼ6名の教員で担当し活動班への目配りが行き届かなかった点、1年次末に実施する校外学習の事後学習を充実させようとする「T-GAP」の開始が遅くなる点などを考えると、上記の課題はやむを得ないところもある。重要なのは「T-GAP」の重心をPBLのどこに置くかということだろう。自分たちでアクションを起こすという「提案・実行」を重視するなら、審査でなく担当者面談制にして夏休みにアクション（本年度のアクションⅡ）を行い、自己評価と修正を経て2学期に再度アクションを実施する方法も有効だと考える。

本年度の「T-GAP」は3つの目標を設定している。12月実施のアンケートでは、活動の性質上、目標（a）（b）の多様な視点や当事者意識、協働の重要性へのコメントが多いことは予想されたが、（c）の自己について触れた生徒もいた。特に班内の衝突や計画の難航など困難を乗り越える過程で短所を克服したり自身の成長を感じたりしている。PBLの場合、どんな結果が出せたかよりも、先回りせず自由にさせてみて結果から何に気づけるか、得たこと・考えたことを次の行動に活かせるかが重要になってくる（もちろん最低限のガイダンスは必要であるが、何が最低限かというのも議論すべき問題である）。これから始まる「卒業研究」も関わっていく社会でも、物事は単純かつ簡単には進まない。失敗から学ぶ場を提供できること、困難な状況でもあきらめず前向きに取り組む気持ちを育てられることが「T-GAP」の意義ではないだろうか。

（国語科 塗田 佳枝）

[d]

T-GAPのアクションを実施するまでに生徒たちはいくつかの活動経験を積んできている。主なものは1年次「産業社会と人間」における職場・施設訪問と「キャリアデザイン」で準備し、校外学習カナダで実施したトロント市内班別自主研修である。職場・施設訪問は前年までは学校が事前に準備した場所を訪問していたが、この学年からは活動班で見学先を決めアポイントメントを取るやり方に変えた。これはT-GAPでのアクションを先取りする新しいチャレンジであった。しかし、交渉が進まない班も見られたが多くの企業がCRS活動の一環として訪問者を受け入れる体制が整っていたため順調に計画を遂行することができた。トロント市内班別研修は異国での活動であったため計画通り進まない班もあった。その中で校外での活動は如何に計画・準備、そしてシミュレーションが大切に気づかされる貴重な経験となった。

これらを基にT-GAPのアクションを実施してきたが予想以上に険しい道りとなったようだ。企業にCRS活動の土台は出来て来たのは確かだが、見学や体験の受け入れはあっても高校生との活動、協働といったアクションになるとハードルが高かったようだった。ましてやNPO法人やサークルなどの小規模の団体になると受け入れが難しかったり、形だけの活動にとどまってしまうたりしたケースが見られた。さらには校内における活動においてすらアクションへの理解が得られないものがあったのは残念であった。そんな茨の道を進んだ甲斐もあり、この一年で生徒たちはタフに育ったような気がする。失敗を恐れずチャレンジする力が次第に身に付いてきたようだ。この力が次年度生徒一人一人で行う「卒業研究」で開花することを期待している。（農業科 嶋田 昌夫）